嬉しいこと二つ

夏の太陽をいっぱい包み込んだ娘たちが職員室に入場して来ます。女子ソフトボール部。キャプテンの挨拶が涼風となって流れます。

「先生方の応援のおかげで、全九州高等学校ソフトボール秋季大会、熊本県予選で優勝することが出来ました。残された課題を克服し、勉学にも励んで、九州大会に出場します。」復帰した名将、福田監督の顔も黒く輝いています。

続いて、また嬉しい報告、北九州の大野様という方からの電話。熊本インターのコンビニで大切なセカンドバッグを忘れ、慌てて店に電話をしたら、本校のサッカー部員が届けていたとのこと。日本はまだまだ見捨てたものではないと、強く思われたそうです。里山に行きますと川のせせらぎと呼べるほどでもない流れに出会うことがあります。そんなささやかな流れが、私どもの心をなごませてくれます。私どもの高校にも、ひっそりと流れる川がいくつもある。それに出会った素晴らしい朝でした。

平成二十年九月二十六日

国府はがき通信

No116

あたり前のこと

厳しい残暑の中、ひるがおが咲いています。校庭の片隅にひっそりと咲いています。どんなに強い太陽の下でも、決してしおれたりはしません。歌に詠まれる事も、人に愛でられることもない花。ひるがお。

そんな花が咲いていた日、出水小学校の教頭先生からお電話がありました。「下校中の小学二年生の生徒が転んで怪我をして困っていたら、通りかかった国府高校の生徒さんが素早く手当をして、自宅まで送ってくれました。保護者の方も大変感謝しています。ありがとうございました。」翌朝、本校でも担任の先生方の呼びかけで、やっと五名の生徒がわかりました。商業科三年の女生徒です。「あたり前の事をしたまでです。」生徒達は明るい笑顔で答えてくれます。このさわやかな生徒を見ていると、炎天下で美しい花を咲かせているひるがおを見る思いがしました。光をおでこにくっつけて、明るい花を咲かせている娘たちよ、今からもあたり前のことを大切に生きて欲しい。

平成二十年九月十九日

選択

「難しい選択なのです。尊厳を守るのか、服従してしまうのか。公平か不公平かを選ぶのです。コミットメントか、無関心か。正義か過ちかの選択なのです。」バラク・オバマ。「どう生きるか選ぶ機会は一回だけ訪れて、人生のコースを固定してしまうわけではない。重要な選択の多くはゆっくりと、時にはあいまいな形で生涯を通じて表れてくるもの。それは何度も何度も選ぶことを求めている。人生は失敗のうめ合せが出来るくらいに長く、また、変化に富んでいる。」マケイン。「高校とは選択をする場所。何を学ぶのか。どんな部活をするのか。誰と出会うのか。自分の価値観を選択する場」熊本国府高校

九月二十三日（火）秋分の日、九時、学校説明会、平成二十一年度から本校は新学科、新コースでスタートします。来て下さい。見て下さい。体験して下さい。そして選んで下さい。「確かなのは人が心を決めて、夢を追ったら不可能はないということ」マイケル・フェルプス・オリンピック水泳、八冠

平成二十年九月十二日

いつも始まり

「人生は選択の連続。自動車を買う時も、まず財布と相談。現金で買うか、ローンで買うか、新車にするか、中古車にするか。軽自動車にするか、中型車にするか。高校卒業後の進路も大事な選択。」

本校「進路だより」第四号の冒頭にこんな文が載っていた。常に新しい情報を生徒に提供し続ける進路指導部、ここには夏休みはない。海の便りも届かない。山の便りも届かない。届くのは会社の情報、大学の情報。二学期、始業式。ああ夏も終りだと、とぼとぼ登校してくる生徒。さあー二学期が始まるぞと、眉を上げて登校する生徒。同じ始業式なのに心がけ次第で随分違ってくる。始まりと思うのも自分、終りだと思うのも自分。生徒に始まりだと思わせる部、それが進路指導部。マドンナ松尾先生を中心に、ここの先生方は「生徒が可愛い」という顔をいつもしている。進路指導部に終りはない。いつも始まりである。

平成二十年九月五日

新しい衣

校庭の樹に蝉の抜け殻が驚くほど残っています。このとても美しいと思えない蝉の抜け殻を、古代の人は「空蝉」とゆかしい名をつけました。せわしげな蝉の声も「蝉時雨」とよべば心が洗われる気がします。何千年も昔から蝉は夜明けに必死になって、脱皮をし、新しい世界へと飛び立って行きました。人もまた、その時代その時代、古い衣を脱ぎ捨てて、未来を目指して生きて来ました。私どもの学校も創立六十七年、常に新たな挑戦を続けています。いつも学生が気持ちよく、向かうことの出来る学校。学ぶことを生き生きと楽しめる学校。豊かさと潤いに満ちた学校。それを具体的な形にするために、新たな挑戦を続けているのです。平成二十一年から、本校は、学科・コースが生まれ変わります。一人ひとりの能力を引き出し、自己実現をはかるための改革です。どうかご期待ください。蝉時雨が終わり、東風が吹く頃、私どもは新しい衣を身につけます。

平成二十年八月二十九日

国府はがき通信

No112

ひっそりと逝った人

暑い夏、テレビでは北京オリンピックでの熱い闘いが連日流される。高校野球もまさに熱戦。そんな時に新聞の片隅にひっそりと河野澄子さんが亡くなられた記事があった。松本サリン事件で倒れて以来十四年。夫、義行さんの手厚い介護があったとは言え、実に無念の人生だったと思う。異変を真っ先に通報したのは義行さん、しかし警察とマスコミに容疑者扱いにされてしまう。人々も流される報道の中で義行さんが犯人に違いないと思い込んでいた。古い不気味な家、農薬のビンが転がっている池、そこに浮かんでいる魚。マスコミは連日、犯人扱いを続けた。だが、事件は日本中を震撼とさせて、思いがけない方向へと発展していく。振り回されるマスコミ。かってな判断をする人々。人間の危うさ、マスコミの怖さ、人間の狂気。オリンピック一色になりつつある夏の日、ひっそりと逝った人のことを忘れてはならないし、しっかりと高校生に伝えねばならないと思う。

平成二十年八月二十二日

国府はがき通信

No111

ゴルフ

「君は毛唐がする遊びをしているのか。」「はあ？」「ゴルフだよ、ゴルフ」校長先生の前で私は直立不動。「馬鹿もんが、そんな暇があったら本を読め、今、どんな本を読んでいる。」「はい、大江健三郎の・・・」「馬鹿、馬鹿、馬鹿たれ、阿保」校長先生が大嫌いな作家だった。ゴルフは亡国の遊びである。教師たるものしてはならない。それが校長先生の信念。それ以後、三十年、私はゴルフをしていない。しかし、心ではゴルフは紳士のスポーツだと思っている。そして、今、この殺伐たる世の中だからこそ若者にゴルフを教えるべきだと思っている。ピコピコ叩くメールより、光のない部屋でひとりゲームをするよりはるかに健康的だ。幸い本校にはゴルフをする先生が多い。先生と生徒、一緒にゴルフ場に出かけていく。青空の中にゴルフボールが飛ぶ。ここにあるのは、風の香りと小鳥の声と日光と微笑み、本校には夢がいっぱい。ゴルフ好きな中学生も大歓迎。

平成二十年八月十五日

健やかに行け

あと一歩、わずかな差なのか。果てしない隔たりなのか。たとえ大きく離されていても、もう背中を抜く以外にない。背中を押すのは敗戦の悔しさ、これまでの練習量、仲間の声。いつか、いちばん暑くて、長い夏を自分のものにしたい。

八月、若者が跳ぶ。若者が走る。若者が捕る。しかし、もうここには三年生の姿はない。

「そうか、もう君はいないのか。」城山三郎さんの奥様を亡くされた喪失感とはほど遠いかもわからない。だが、この寂寥感は何だろう。

「静かに行く者は健やかに行く、健やかに行く者は遠くまで行く。」夏雲をながめながら、三年生よ、健やかに行け、健やかに遠くまで行け、と叫ぶ。

平成二十年八月八日

国府はがき通信

No109

楽しい夏休み

七月二十五日、しばらく職員朝礼はありません。朝礼がなくなると「夏休み」という感じが学校中に広がります。休みになっても生徒達は活動しています。学校のそこここに、汗を流している若者の姿を見かけます。職員室でも誰かが何か仕事をしています。黒板には合宿計画がびっしり書かれています。けれど夏休みです。どこかゆったりと時間が流れます。その職員室に優勝旗が一本、燦然と輝いています。全体の朝礼が終わった日に取ってきた優勝旗です。「優勝おめでとうございます。」大きな声をあげると、「ありがとうございます」と若い女の先生の美しい声が返ってきます。商業科の先生です。そうです。これは商業研究発表の優勝旗です。堂々たる生徒の発表。むしろ緊張していたのは先生の方で、前日は食事ものどを通らなかったとか。優勝旗を前に明るい笑い声が響きます。職員室でこんなに声をあげて笑うことが出来るのもやはり夏休み。実に楽しい夏休みの始まりでした。

平成二十年八月一日

先生の心配

高校に落第という制度が生きていたのは、いつ頃までだったでしょうか。かつて、丸坊主で顎鬚だけ伸ばしている四年生がいました。長髪禁止に抵抗して顎鬚を伸ばしているのです。漢詩を諳んじ、英字新聞を広げていました。新入生は度肝を抜かれました。あんな人が落第生なら自分も落第だと青くなったものです。ただこの四年生、数学になるとからっきし駄目で、その一科目のために高校を四年も続けていたのです。今でも高校は赤点を取ると進級も卒業も出来ない事になっています。しかし、落第生はいません。本校でも学期ごとに補講して、なんとか進級させています。担任の先生は朝早くからその生徒に電話します。「遅刻するなよ。補講は一時間目だよ」先生の方が忙しいのです。生徒にどう意欲を持たせるか。そのために先生方は東奔西走します。そして終業式、ありがとうございましたと言われても今度は夏休みが心配になってくるのです。

平成二十年七月二十五日

国府はがき通信
No107

<スポーツ>
人間は動くもの、泣くもの、
笑うもの、
スポーツはきみのもの。
自然にいどみ　自分とたたかい
かぎりない未来に向かって、
人間であることのために
生きていることをたしかめる
おのれのしるし。

鶴見正夫

平成二十年　七月十九日

「朝の清掃十年目、国府高校陸上部員ら、学校周辺で」。熊日七月十一日の朝刊、生徒たちが自主的に始めた活動が十年、ゴミが落ちていたら拾おう。ちゃんと寝て、ちゃんと眠って、ちゃんと起きて、ちゃんと勉強する。結果を残すこと以上に人として生きたい。限りない未来に向かって自分の生きているしるしを残したい。これが本校の部活動。この若者には夏が似合う。今年の暑さに悲鳴をあげている私には生徒たちは限りなく美しい。

国府はがき通信
No106

ご招待

校門を入って、左に曲ると、そこに大賀はすが咲いています。はすの花が咲く朝は、大気が澄んで、風がかすかに吹いています。

耳をすませて下さい。聞こえてきます。遠い記憶の底に、流れる素朴な詩、くりかえし語りかける命の詩。涙を流すのも、ため息をつくのも、似つかわしくありません。二千年の時を超えて、この美しい花が今咲いている。そのことと向きあうべきです。今が身頃です。しなやかに伸びた茎。大きな葉。そこにすくっと咲く花。なんという色でしょう。ピンク、いえいえ、もっと上品。白色、いえいえ、もっと純潔。街の喧騒が伝わる頃は、静かにそっと目をつぶります。

ですから、どうぞ、朝早くおいで下さい。

平成二十年七月十二日

国府はがき通信

No105

大切にしたい

「運転手付きご出勤でいいね」朝七時過ぎ。いつもベテランの先生が運転する車から若い先生が降りて来る。若い先生に私が軽口を叩く。二人は兄弟みたいな雰囲気である。この若い先生のいらだちや悩みは車の中で解消されるに違いない。時々はベテランの先生の酒の相手をさせられるかもわからない。説教されるかもわからない。しかし、このことは今の社会にとって、実に大切なものが含まれている様な気がする。今、日本の若い世代の間では、社会への絶望や不満が渦巻いている。そして、問題なのは若い人を大人として育てるところがなくなっている事だ。かつて日本には若者を叱り、若者を育む社会があった。

東京秋葉原の無差別殺傷事件、その幼稚で身勝手な凶行に慄然とする。このような事件を生み出す背景に漆黒の闇を見る思いがする。

私が座ると黙ってコーヒーを入れてくれる若い先生。「早く結婚して、日本の少子化を防いでよ」と冗談を言う私。このような職場をいつまでも大切にしたい。

平成二十年七月四日

命を繋ぐ

きりっとした眉、深く澄んだ瞳、髪を後に束ねて、小松史果先生（本校平成十七年卒）が研究授業をしています。筑波大学四年生。ハンドボール日本代表選手。丸坊主の男子生徒が積極的に答えて、先生を助けています。「妊娠、出産と健康」保健、商業科二年二組の授業です。このクラスには野球部のバッテリーもいます。ふと窓の外を見ますと、大賀ハスが風に揺れています。計り知れない時間を経て現代に蘇った花。外ではこの花が懸命に咲いている。教室では生命の誕生の尊厳が語られている。魂が深まる不思議な時間、連綿と続く命のリレー。人も花も命を繋ぐという点では同じです。小松先生はこの大賀ハスが似合います。健康で明るくて聡明、万葉人もきっとこんな美人だったに違いありません。花の命も人の命も太古の昔からずっと繋がってきたものです。そしてこれからも繋がっていくものです。大賀ハスを愛でる心も命を繋げる大切な授業だということを知って欲しいと願ったものでした。

平成二十年六月二十七日

田植え体験学習

春になると沈丁花の香が街に流れ、五老が滝の水流が増すと一気に夏が来ます。樹々には蝉が群れて、夜は星が広がります。八朔祭の山車が繰り出す頃になるともう秋。そして冬、雪が降ってかまくらを作る楽しみもあります。ここは矢部、今は山都町。六月十六日、本校商業科三年五組が田植え体験学習をしました。野球部員も五人参加。「一番印象に残ったのは矢部の自然の豊かさ、美しさ。地域の人達の優しさ、温かさです。とても好きになりました。自然に囲まれ活動して、不思議なパワーを貰って、とても元気になりました。」野球部主将、桑鶴君の感想です。今からが最も長く暑い季節。最後の夏を笑うために必死に練習している野球部。野球以外には何の余白もなかった彼等に矢部の自然、矢部の人々の温かさが、じーんと染み込んできたようです。このパワーを戴いて、野球部はこの夏、心技体一つになって闘い、魂を込めたプレーをしてくれるに違いありません。矢部の田植え体験学習はそんな思いをさせてくれた一日でした。

平成二十年六月二十日

打ち込む

「チャンピオンになる必要はない。打ち込めるものがあれば、人は強くなれる。」ボクシング世界王者、内藤大助。緑の風、大声援、勝利への執念、汗と涙。高校総体、高校総文が終った。本校ではチャンピオンになったのは、円盤投げの藤本雅子さん（東陽中出身）、団体競技では、あと一歩でチャンピオンになることは出来なかった。準優勝、ハンド（男）、ＮＨＫ旗高校野球、陸上フィールドの部（女）、第三位、ハンド（女）、サッカー、バスケット（女）。「高校時代、何か一生懸命になるものを見つけなさい。何でも良い。何かに打ち込んだ三年間は素晴らしいものになる。」入学式での本校理事長、早坂隆先生の言葉。華やかな表彰台に立てなくても、演劇、吹奏楽、剣舞、バトン、電卓、珠算など多くの生徒が活躍した。今年の一年生は全員部活動に参加している。生徒が汗を流し、青春を燃焼させて、その結果チャンピオンになってくれたら、これ以上の喜びはない。この六月が終ると、いよいよ夏の高校野球大会。少年の跳躍、捕球、風薫る。

平成二十年六月十三日

北極遠征十五周年

ミャンマーの台風被害、中国四川大地震、幾たびも繰り返される自然の猛威の前に、私どもはただ絶句し、立ちすくむばかりです。人の力を超えた凄まじいエネルギーに一体どう対処すれば良いのでしょうか。昔から人々は自然の営みの中に解決法を見い出し、エネルギーを生かす道を考えてきました。だがその営みも、人間中心の考え方では自然の猛烈なしっぺ返しを受けてしまいます。今、北極が大変動しています。音を立てて崩れ落ちる氷河、北極の氷がなくなっているのです。そこに群がる世界各国。資源開発。さらに溶ける氷。負の連鎖が始まっています。十五年前、本校も北極に遠征し、そこに鯉のぼりを立てました。今、人々に求められるのは、この自然を愛する心ではないでしょうか。だから、熊日四月三十日付「きょうの歴史」にも、この遠征が記されるような気がします。北極開発に奔走する人々に、いつの日か自然はそのお返しをするのではないか。北極遠征十五周年にあたり私どもは強く思ってしまいます。

平成二十年六月六日

きらめきの中へ

高校という季節は人生のきらめきとは何か、輝く日々とはどんな時なのか、それを問いかけているような気がします。一日に一度はきらめいていたい。光の帯のように、きらめきの瞬間でつながっていたい。そのきらめきが自分だけのものでなく、自分のまわりの人のきらめきへとつながっていたい。それが高校時代の問いかけであり、願いではないでしょうか。ある詩人は謳っています。『われは草なり、伸びんとす。伸びられるとき伸びんとす。ああ、生きる日の美しき。ああ、生きる日の楽しさよ。われは草なり、生きんとす。草のいのちを生きんとす。』生きるということ、きらめくということ、伸びるということ、輝くということ、そんな問いかけに応えるのが高校総体、高校総文のような気がします。本校も五月三十日から始まる、この高校生最大のイベントに総勢二百六十名の生徒が参加します。人生のきらめきの中へ、伸びる光の中へ、美しく生きる若者の姿がここにあります。躍動する若者の姿がここにあります。

平成二十年五月三十日

歴史を刻む

テノール歌手秋川雅史さんの澄んだ歌声が夜空に響きます。天守閣から緑色のレザー光線が二万二千人の頭上を旋回します。熊本城二の丸広場。グランドフィナーレ音楽祭。このレザー光線の仕事をしていたのが本校卒業生、西川雅史君です。平成十五年卒業。超ロングラン「築城四百年祭」の締めくくりに素晴らしい仕事が出来て、輝いていました。在学時代は進路に悩み、担任の印南先生、谷口先生に何度も相談したそうです。「技術者になれ、技術に学歴はない」担任の先生のアドバイスが彼の進路を決めました。熊本城築城四百年、歴史の鏡の中で一瞬の現在はどこかに消え去る煙のようなものかもわかりません。まして、一人の人間の存在など粟粒みたいなものかもわかりません。しかし、その一瞬一瞬、そのひとりひとりが結局歴史を作っているのです。だから歴史を作るというのは現在を丁寧に生きる事ではないでしょうか。こうして一つの時をしっかり刻む事は、その歴史の掛け替えのない参加者になる事ではないでしょうか。西川君は今確かに歴史を刻んでいる。そんな気がしました。

平成二十年五月二十三日

栄光へのリズム体育大会

走る

前へ　前へ
ただまっしぐらに
前へ
きみの前にはゴールがまつ
きみのうしろにはスピードが残る。
単調な手足のくり返しがきざむ
栄光のリズム。
きみがきみとたたかう
この長い道程

鶴見正夫

平成二十年　五月十五日

早朝、カタカタと竹を叩いてリズムを取る音が聞こえます。それにあわせて応援団が演舞の練習をしています。部活動で活躍している生徒が何人もいます。五月十六日（金）体育大会。部活動で勝利する事は大切。けれどこうして、学校行事に率先して参加する事はもっと大切。前へ、前へ、ただまっしぐらに生徒達は走り出しています。人生の長い道程。高校生活は栄光へのリズムを調える時でもあるのです。そのための体育大会でありたいのです。

結び葉

やっと名前がわかった。井山龍太郎君（楠中出身）だ。朝からある中学校の母親から電話。中学一年生の娘さんが帰宅途中、自転車で転倒。胸を強打。あまりの苦しさにうずくまっている所に井山君が通りかかった。すぐに救急車を呼び、声をかけ続けたと言う。助けられた娘さんの親は大変に感謝。井山君の自転車のステッカーを手がかりに本校に電話してきた次第。本校でもこの時初めて、井山君の善行がわかったのである。一年生の宿泊研修の帰りでの出来事。

季節は初夏。花が終わり、いつの間にか若葉が伸びている。やがてこの若葉は重なり合って、青葉となって茂っていく。この重なり合い、広がることを結び葉という。人生の中で高校生活は、この結び葉の季節ではないだろうか。手を広げ、手を伸ばし、手を結び、友情を育てていく。人のやさしさが重なり合う日々、それが高校生活。井山君の善行は新入生の出発にふさわしい朗報であった。

平成二十年　五月九日

平和

第122回九州地区高校野球選手権大会。長崎県営球場。右手を真っ直ぐに伸ばして、長崎西陵高校、堤タケル選手の宣誓が青空に響く。この平和のもと、野球が出来る喜びを高らかに謳った見事な宣誓だ。原爆が投下された時、人々が水を求めて殺到した浦川が下に流れ、白鷺がじっと立っている。創部三年にして本校は初めて九州大会に駒を進めた。初戦は沖縄の浦添商業。戦後長い間、米国統治下の沖縄は甲子園に出場できなかった。記念大会で出場した首里高校は甲子園の土を持って帰る事が出来ず海に流した。戦後六十三年。苦難の歴史を刻んで、今や沖縄は高校野球の頂点に立っている。試合は完敗。準優勝した浦添商業はやはり強かった。負けはしたけど、本校の生徒たちは大きく成長した。人は日の当たる場所に立てば立つほど成長すると言われている。本校の野球部をさらに、日の当たる場所に立たせたい。そして、こうして当たり前に野球が出来るこの幸せについて学ばせたい。

平成二十年　五月二日

鯉のぼり

龍門。黄河が竜門山を越え、滝となって落ちる所。そこを登りきることの出来た鯉は龍になるという伝説があります。江戸時代の人々は、子どもが健やかに育つように鯉のぼりを立てました。我が子が人生の激流を登りきって、龍になって欲しいという願いが込められているのです。今、春の薫風をいっぱいに受けて、大空を悠々と泳ぐ鯉のぼりが全国各地で見られます。川で泳ぐ鯉を大空に泳がせるというこの斬新な発想は、実に素晴らしいものだと思うのです。

平成五年、本校は北極に遠征しました。この時、鯉のぼりを持参して、北極の地に立てました。このことは「北極の空に泳ぐ鯉のぼり」という見出しで、全国に喧伝されています。この遠征を記念して立てられた小さな碑の横に今年もまた、大きな鯉のぼりが立っています。四月十八日、この鯉のぼりに見送られて、一年生が合宿研修に出かけました。龍にならなくても良い、どうか人生の激流に負けない生徒に育って欲しい。それが、私どもの願いなのです。

平成二十年　四月二十五日

君の花は

桜が咲く頃になると、あちこちの村で舞台が設けられた。歌あり、踊りあり、そして肥後にわかがあった。神社では村相撲があり、立派な桟敷まであった。しかし、時とともに村には人が居なくなり、舞台がなくなり、肥後にわかもなくなった。そんな淋しい思いをしていた時に『にわかの魅力ば知って』という新聞の記事が目に飛び込んできた。「ばってん劇団」のメンバー、「ばってんれんこさん」の記事だ。本校卒業の「ばってんれんこさん」、十七代続く森辛子蓮根店のお嬢さん、逢ってみると宝塚出身を思わせる美人。中学時代からミュージカルが大好きで、舞台に憧れていたという。人はいつも自分なりの夢や憧れを抱いて、いつかやってみたいと思いながら、日々の生活の中に流れてしまうもの。中学時代からの夢を肥後にわかの世界で実現させている「れんこさん」。その生き生きとした明るさが美しい。「君の花は、いま君がいる、そこに咲くのだよ」そんな言葉がぴったしの「れんこさん」である。

平成二十年　四月十八日

国府はがき通信

No93

新しい歴史を作る野球部

あがった、三塁への小フライ。石原選手が、がっちりつかむ。勝った。五対三。**優勝**。第122回九州地区高校野球熊本大会。前日、「僕らにとっては最後の年、九州大会に出場して新しい歴史を作りたい。」主砲の川端選手が話す。この生徒が入学して来たのは二年前、その時野球部が発足した。野球を通して、人間作りをしたい。それが私どもの目標。挨拶が出来る生徒、勉学する生徒、生徒会などで率先して学校の中心になる生徒。永薗監督の一日は、机上にうず高く積まれた部員の日記を読むことから始まる。そこには野球の話、進路の悩みなど、様々な事が書かれている。監督はそのひとつひとつに朱筆を入れる。この毎日毎日の活動が今回の優勝につながった。本気で笑える友がそばにいるから、本気で語る夢がある。本気で心配する友がいるから、本気で全てをさらけ出せる。流した汗の数ほど素敵なことがある。これが本校の野球部である。

平成二十年　四月十一日

言葉の宝石

遠ざかっていく一点を、いつまでも見送っている。卒業生を送り出した後は、いつもこんな気持ちになります。遠ざかっていく時、若者は宝石みたいな言葉を残して行きます。ただ生きるな、よく生きろ、頑張れば頑張るだけ自分の誇りになる。福島大智（県技短）第一印象は五秒で決まる。日頃から服装態度をきちんと。原谷昌輝（熊本学園大）夢が実現した時、感謝という言葉の本当の意味がわかる。夢実現のために一歩一歩の努力を。藤原みなみ（熊大）夢のような高い目標を持って、そこに向かって努力していけば道は開ける。石田亮平（北見工大）先生方は受験のプロ、良い意味で先生方を利用せよ。朝課外授業を大切に。本田喬道（北海道教育大）。良いライバルを持て、地道な努力を大切に。富田浩二（熊本県立大）三月十八日に行なわれた「卒業生に聴く会」卒業生の言葉は心の窓を拭くハンカチ。その言葉の宝石を在校生が一つ一つ拾っている。そして、私達は純白の羽根を開いて飛び立つ若者をいつまでもいつまでも見送っている。

平成二十年　四月四日